

8-14 板の座屈応力 (DIN 4114による)

$$\sigma_e = \frac{\pi^2 \cdot E \cdot t^2}{12b^2(1-\mu^2)} = \left(425 \frac{t}{b}\right)^2$$

σ_{1ki}, τ_{ki} : 板がまさに座屈しようとするときの応力度
(理想座屈応力度)

k : 荷重状態・板の境界条件および寸法比

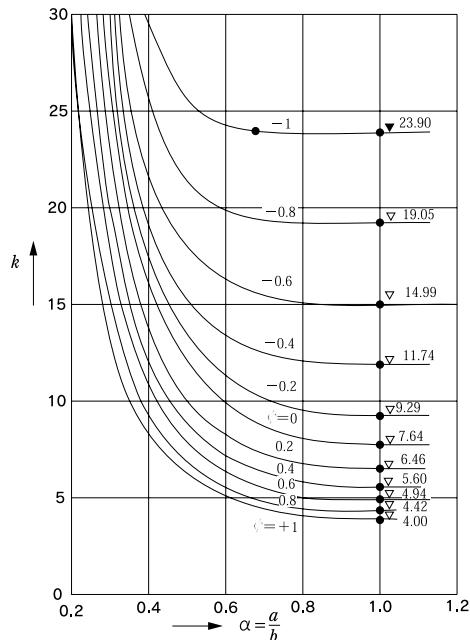
$\alpha = a/b$ によって変化する座屈係数

σ_e : 基本座屈応力度 (オイラーの座屈応力度)

E : 弹性係数 (鋼= 2.0×10^5 N/mm²)

μ : ポアソン比=0.3

t : 板厚



荷 重		座屈応力度	適用範囲	座 屈 係 数
1 直線分布の圧縮応力 $0 \leq \phi \leq 1$		$\sigma_{1Ki} = k \cdot \sigma_e$	$\alpha \geq 1$	$k = \frac{8.4}{\phi + 1.1}$
			$\alpha < 1$	$k = \left(\alpha + \frac{1}{\alpha}\right)^2 \cdot \frac{2.1}{\phi + 1.1}$
2 直線分布の圧縮応力と引張応力、ただし圧縮応力大なる場合 $-1 < \phi < 0$		$\sigma_{1Ki} = k \cdot \sigma_e$	$k = (1 + \phi)k' - \phi k'' + 10\phi(1 + \phi)$ ここで k' は $\phi = 0$ (第1行欄) の場合の座屈係数、 k'' は $\phi = -1$ (第3行欄) の場合の座屈係数	
3 直線分布の圧縮応力と引張応力、ただし両縁等しい場合 $\phi = -1$		$\sigma_{1Ki} = k \cdot \sigma_e$	$\alpha \geq 2/3$	$k = 23.9$
			$\alpha < 2/3$	$k = 15.87 + \frac{1.87}{\alpha^2} + 8.6\alpha^2$
4 等分布せん断応力		$\tau_{Ki} = k \cdot \sigma_e$	$\alpha \geq 1$	$k = 5.34 + \frac{4.00}{\alpha^2}$
			$\alpha < 1$	$k = 4.00 + \frac{5.34}{\alpha^2}$

注) *寸法比 α および Euler の座屈応力度 σ_e の計算に際して、ここにおける b の代りに、仮想の値 $b_i = 2b_D$ を用いる。ここで $b_D < 0.5b$ すなわち圧縮部分の幅である。ただし、この場合でも、等分布せん断応力の座屈係数 k の計算には、実際の b を用いなければならない。

8-15 梁の曲げ振動

$$P_n = (\lambda_n l)^2 P_0, \quad P_0 = \frac{1}{l^2} \sqrt{\frac{EI}{m}}$$

$$f_n = \frac{P_n}{2\pi}, \quad T_n = \frac{1}{f_n} \quad (n=1, 2, 3, \dots)$$

P_n : 固有円振動数 (rad/sec)

f_n : 固有振動数 (Hz)

T_n : 固有周期 (sec)

m : 梁の単位長さ当たりの質量 (kg/m)

EI : 梁の剛度 (N·m²)

l : 梁の支間長 (m)

支持条件	$\lambda n l$			振動形
	$n=1$	$n=2$	$n=3$	
	3.142	6.283	9.425	
	1.875	4.694	7.855	
	3.927	7.069	10.210	
	4.730	7.853	10.996	

注) 歩道橋の場合、たわみ振動の固有振動数が1.5~2.3 Hz にならないようにすることが必要である。